

ファミリーハウスに登録したアパートの前で、「体が動くうちは、人の役に立ちたい」と話す安藤妙子さん

札幌の安藤さん11年前から宿泊先提供

看病の家族に 寄り添って

自宅から離れたまちの病院に入院した家族に付き添う人に、低料金で宿泊先を提供する「ファミリーハウス」。札幌市中央区の安藤妙子さん(82)は、同市内で経営している2棟のアパートのうち1棟の空室を、11年前から同ハウスに登録している。これまでの利用者は延べ800人。亡き夫の入院に付き添った経験から「看病する人の苦勞が分かる。体が動くうちは力になりたい」と話す。(片山由紀)

「お世話になりました。えれば、うれしい」。19日、白石区水1の木造2階建てのアパートの前で、1人の女性が頭を下げた。お大に安藤さんが腰を痛めたのを機に離農。札幌を振って見送った。朝はいつてらっしゃい、夜はお帰りのさいって声をかけるの。そんな一言でホッとしてもら



亡き夫の付き添い経験「力に…」話し相手にも

は空室があり、がん治療の専門病院や総合病院からも近い。「看病でつらい思いをしている人を救えるなら、夫も喜んでくれる」と、2室を登録した。和室と居間の1DKで、利用料は1泊2千円(冬は2300円)。ベッド、布団、タンス、冷蔵庫、テレビのほか、台所用品もそろえた。最初は利用者がいる期間だけアパートに通っていたが、7年前からはアパートの1室に住み、利用者の世話をするようになった。登録する部屋も4室に増やした。

利用者の滞在日数は1泊から1カ月ほど。毎日声をかけるうちに、「大家さん、お茶を飲みに来ない」と呼ばれ、部屋で語り合うことも増えた。「母親みたいに温かいね」と泣かれたほか、「話を聞いてくれてありがとう」と感謝されたこともあった。

安藤さんは昨年からは、市内の夜間学校で英語を習い始めた。「以前台湾の人が利用してくれただけど、全然話せなかった。残念だねえ。今後外国人が来た時は、お世話がしたいから」と目を輝かせた。

街のうた

